



聖地に吹く風



喬城奈緒海

私が関東に引っ越しをしてから、もうすぐ20年になろうとしている。嫁ぐ、という事情だから仕方がないのだが、私の中で「鉄板」と信じ抜いてきた3つのことが全部関西でしか通用しないものだ気付かされたのである。ひとつめは刺身醤油の存在、ふたつめは「肉」イコール牛肉という認識（群馬では「肉」といえば豚肉を指す）、そしてみつつめが民放の夏の甲子園全試合中継だ。最初のふたつは臨機応変で解決できるからいいとして、民放（夏は今でも関西ではABCテレビ）が準決勝第二試合と決勝しか放送しないという現実には愕然とした。それが当たり前と、幼少から青年になる前までの数年間を過ごしたからなおさらだ。兵庫代表の予選は「どのみち甲子園で見れるからどないでもええわ」というあまのじゃくな考えから一度も生では観なかった。阪神甲子園球場は神戸最大の繁華街・三宮（さんのみや）から阪神電車で約30分前後、と物理的にいつでも手の届く場所にある。神戸在住時代はそれが「標準」だった。しかし、群馬県に移り住んだ今となっては、甲子園も大好きな民放のエキサイティングな中継も遠い存在になってしまった。その代わりに、群馬の県大会に時折足を運んでいる。そうしていくうちに、私と地元民たちとの甲子園に対する価値観の違いを思い知らされたのだ。「甲子園を手繰り寄せる」そうか、これが甲子園から物理的に離れている民たちの、甲子園に対する意識なのか。だが、私はそんな人々にこそ、迎える側の包容力のようなものを何かで伝えたい。2004年秋、私は五行歌という文芸と出会った。そうだ、こういう方法で甲子園のお膝元にいたなりの高校野球への思いを発信してみよう。その活動は今でも続けている。いつしか高校野球五行歌は私の代名詞となってしまった。むしろそう言われることが私には最大の褒め言葉だと、今では自分に言い聞かせている。五行で綴る、高校野球賛歌。鳶の聖地を吹き抜ける風はどこまでもゆるやかで、優しい。私はそんな浜風のようなうたびとでありたい。高校野球を詠むときは、いつも胸の奥で浜風を感じながら……。夏代表決定に湧く地元民たちの弾けっぷりを見届けながら聖地に吹く風の記憶を手繰り寄せる私がいる甲子園、それは私のもうひとつの「帰省先」である。2012年8月 神奈川の二年生奪三振王の夏が終わった日に 喬城奈緒海